

日本消化器外科学会雑誌編集後記

過ごしやすい秋はあっという間に過ぎ去り、厳寒の冬が到来し、北朝鮮のミサイル発射、総選挙など慌ただしい師走の時期となりました。

11月29日～12月1日までの日本臨床外科学会総会、12月6日～12月8日までの日本内視鏡外科学会総会と日本消化器外科学会会員の皆様もご多忙な日々を過ごされたと思います。小生もこの2つの学会期間中に6つのプレゼンテーション、9つの司会と非常に忙しくもあり外科医として充実した日々でもございました。活躍する場を与えていただくことの嬉しさと責任の重大性を実感する毎日でした。しかし、この2週間で家を空けた日数は9日間におよび、家族との会話もほとんどない状態でした。

小生は長男（高校2年）、長女（中学2年）、次女（小学3年）の3人の子供がおります。ご記憶にも新しいと思いますが、12月7日の夕方に学会会場のパシフィコ横浜で学会参加者の多くが、かなり大きな地震と遭遇しました。小生も東日本大震災の記憶がよぎり、名古屋にいる家族が心配となり、妻の携帯に電話をかけました。すると長女が電話にでました。小生は「名古屋は地震の影響は大丈夫か？」と聞いたところ、娘は「名古屋は大丈夫だけど、パパは何処にいるの？そっちは大丈夫なの？そういえば最近会ってないね！」といわれました。地震のことより、家族、特に子供達との時間の少なさを痛感した次第です。「一生懸命働く父親の背中を見て子供は育つ」とよくいわれますが、本当のことなのでしょうか？ふと不安になるこの頃です。

さて、本誌の編集委員を拝命させていただいてまだ1年ですが、症例報告というカテゴリーについての小生の意見を述べさせていただきます。過去の症例報告数がいかに少ない症例であっても、その診断法や治療法に関して外科医に有益な情報が乏しい論文は価値の低い論文だと思います。今後の投稿に際して、本邦初の報告であるとか、非常に珍しい症例であるなどの希少性より、その論文を読んだ外科医の日常診療にどのような有用な情報を提供できるかという視点から論文作成をお願いしたいと思います。

(宇山 一郎)

2012年12月